

# 「夢の島」

## － 現代沖縄における風景と観光 －

安藤徹哉



最初に結論を書いておこう。観光とは何かに対してあこがれのまなざしを向けること。ここではそれを“夢”とよぶことにする。もちろん、そこには善意のかん違い（たとえばオリエンタリズム）もまぎれ込む。かん違いがなければ恋さえできない。そう、恋も夢のうち、ある種の観光なのである。

沖縄はこれまでさまざまな夢を見てきた。また、見られもしてきた。

パラダイスの語源はペルシャ語の「閉じられた庭園」にあると言われるが、夢の種は常に手の届かないフェンスの中で生まれる。米軍基地、沖縄国際海洋博覧会、リゾート開発、そしてマスメディアによる情報。そうした非日常的な夢は、いつのまにかフェンスの外へと伝播していき、沖縄を夢と現実が交錯する不思議な世界へと変貌させていく。

## 1. アメリカンドリーム

これはすべてのベースのあるまちに共通することなのかもしれないが、戦後、沖縄にアメリカ文化は米軍基地を通して入ってきた。アメリカ人の豊かなライフスタイルへの憧れと基地への憎しみは、大城立裕著『カクテルパーティー (1967)』やコザ暴動 (1970)<sup>1</sup>などに示されている。

本土復帰の前年 (1971)、シンシアこと南沙織 (写真 1) が本土デビューする。小麦色の肌にサラサラのロングヘアーで歌うその姿は、アメリカンスクール出身で英語が堪能ということもあり、どこか異国の雰囲気をも身につけていた<sup>2</sup>。南は、沖縄→サウスアイランド→日本のハワイへとつながるカタカナの“オキナワ”をビジュアライズしていた。こうした沖縄=日本のハワイ路線の延長線上に、本土復帰の翌年発行された『anan 海の特集号 (1973年6月号)』がある。

1973年にはアメリカのジャクソン5を意識したフィンガー5 (写真 2) がデビューする。ダンスブルなブラックミュージックは、沖縄アクターズスクール出身アーティストたち (安室奈美恵、MAX、SPEED、DA PUMP) に引き継がれていく (写真 3)。

しかし、70年代の沖縄で最も印象的だったのは、コザ (現沖縄市) で演奏していた紫やコンディショングリーンといったハードロックバンドだろう (写真 4)。彼らは日本のフォーク歌手たちが国産のジーパンをはいて反戦平和を歌っていた頃、リーヴァイスのジーンズでスカッチを飲みながら<sup>3</sup>、ベトナム戦争で殺気立つ米兵相手にロックしていた。

当時の庶民のあこがれの的は、良く手入れされた芝生の庭に真っ白にペイントされた住宅が映えるモダンな米軍住宅地 (写真 5) だった。戦後、復興期の沖縄をグロリア台風 (1949) が襲い、290人を超える死傷者を出した<sup>4</sup>。米軍はブロック工場を立ち上げ、台風対策としてブロックによる住宅建設を奨励した<sup>5</sup>。南洋材で作られた粗末な復興住宅に住んでいた人々の目には、台風や白蟻の心配がないブロック造の外人住宅は光り輝いて見えたはずだ。10年後には新築住



写真 1 南沙織



写真 2 フィンガー 5

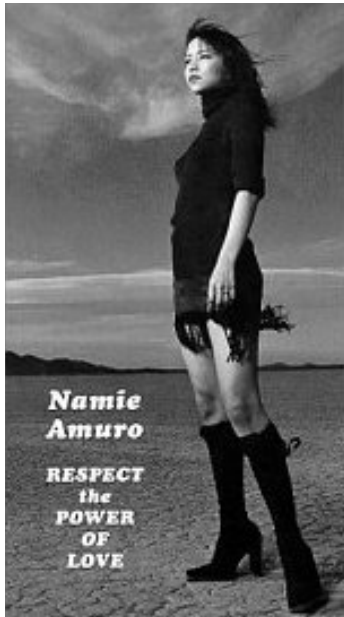


写真 3 安室奈美恵



写真 4 紫

宅に占める非木造の割合が木造の割合を上回り、今では木造はわずか2%を占めるにすぎなくなった<sup>6</sup>。

ブロックは新しい時代の象徴であり、人々は競って戦前から伝わる珊瑚の石垣をブロック塀に建て替えていった（今では後悔している）。やがて、米軍施設工事を通して本格的な鉄筋コンクリート構法を習得した建設業者たちが民間の住宅にもそれを応用するようになり、角出し住宅（写真6）<sup>7</sup>が次々に建設されていく。敷地に余裕のないフェンスの外では、平らな屋根の上に水タンクを乗せた住宅が市街地を埋めつくし、どこか中近東あたりを思わせるエキゾチックな景観を作り上げていった（文末のコラム参照）。近ごろなにかと批判を受けることの多い沖縄の市街地景観は、かつてあこがれのまなざしに向けた夢の末裔だったのである。

一方で外人住宅は、いまだにステータスを保っている。つい最近も、雑誌で「外人住宅に住もう」という特集が組まれたばかりだ<sup>8</sup>。1995年（米兵による小学生暴行事件が起きた年でもある）にオープンした北谷町美浜のアメリカンビレッジ（写真7）<sup>9</sup>は多くの人を集めて賑わいを見せ<sup>10</sup>、先月オープンした沖縄市中の町のミュージックタウン（写真8）<sup>11</sup>ではロックをテーマにまちづくりを進めている。今年で24回目を迎えたピースフル・ラヴ・ロックフェスティバルも盛況のうちに終わった。米軍基地がある限り、沖縄のアメリカンドリームはリアルだ。

## 2. ターニングポイント

ベトナム戦争が終結した1975年は、色々な意味で沖縄のターニングポイントとなった年だった。本島北部の本部町で開催された沖縄国際海洋博覧会（以下、海洋博）は、それまであまりぱっとしなかった沖縄のイメージ<sup>12</sup>を大きく変えるきっかけとなった。大阪万博（1970）に続けて海洋博をプロデュースすることになった沖縄開発庁企画調整課長（当時）の池口小太郎は<sup>13</sup>、海洋博の効果を経済的効果<sup>14</sup>と社会・文化的

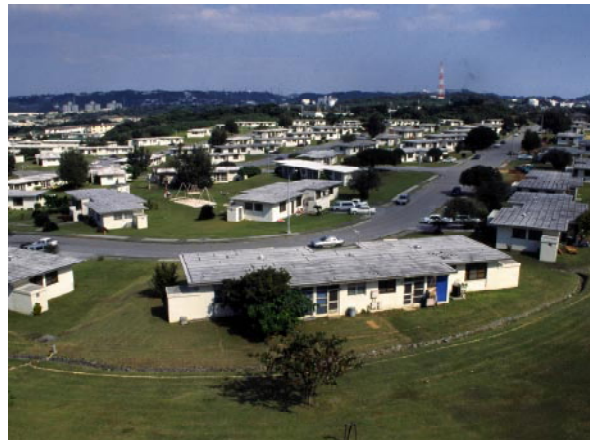


写真5 米軍住宅地



写真6 角出し住宅



写真7 美浜アメリカンビレッジ



写真8 中の町ミュージックタウン

効果の相互作用として捉え<sup>15</sup>、前者に南国＋青い海、すなわちトロピカルイメージを、後者に琉球イメージをあてはめた。

トロピカルイメージを可視化したのは、ホテルが集中する那覇市と博覧会場を結ぶ国道58号線（写真9）と会場内に作られた日本初の人工ビーチのエメラルドビーチ（写真10）だった。国道58号線は<sup>16</sup>、宮崎県の事例を参考に南国ロードパークとして計画され、沿線に外来種の熱帯花木やヤシなどが植えられた<sup>17</sup>。

沖縄では現在、観光客はリゾートホテルのプライベートビーチで楽しみ、地元住民は公設の人工ビーチ（写真11）を利用する形でビーチの使い分けが確立している。本島内だけでも十指に余る人工ビーチが整備され、そのほとんどが埋め立てによるものである<sup>18</sup>。人工ビーチは、青い海と白い砂浜を手軽に楽しめる場所として人気がある。地先を埋め立てて作るため、実際には生物がいない不毛の海なのだが、波打ちぎわで子供に水遊びをさせる程度の利用客にはそれで十分なようだ。こうした埋め立て工事に反対するのは、沖縄の海が好きで移り住んできた県外からの移住者に多い。

白砂のきらめく人工ビーチは、観光ポスターに使われるリゾート写真そのものである。海洋博から三十数年がたち、ようやく県民はトロピカルなリゾートライフという“夢”を手にすることができたのだ。

海洋博における琉球イメージは、沖縄の歴史・文化を紹介する沖縄館（写真12）が一身に担っていた。仕掛人の一人だった高良倉吉（現、琉球大学教授）は、その後も首里城復元（1992）やNHK大河ドラマ『琉球の風（1993）』のセット監修<sup>19</sup>など、琉球イメージの普及につとめていく<sup>20</sup>。

沖縄館の設計を担当した金城信吉（1934-84）たちが用いた赤瓦葺きの大屋根<sup>21</sup>は、一見、観光客に迎合した安易な地域主義にも見える。しかし、経済力を背景に本土企業が土地の買い占めや乱開発を進めていた当時の状況を考えると、そうした状況に対する沖縄からの異議申し立てのプラカードのようにも見える。



写真9 国道58号線



写真10 エメラルドビーチ



写真11 宜野湾トロピカルビーチ



写真12 海洋博沖縄館（現存せず）

ここで少し、沖縄文化の象徴とされる赤瓦について考えてみたい。郷土色を売りものにする琉球居酒屋は、店先を赤瓦の小庇やシーサーで飾り立てことさらに“沖縄らしさ”を強調する。こうした商業的な店舗デザインの延長線上に、古民家を利用したそば屋や民家村、あるいは観光地として有名な竹富島（写真13）<sup>22</sup>なども位置づけられるだろう。恩納村には、首里城をコピーした土産物屋の御菓子御殿（写真14：2001）まで登場した<sup>23</sup>。こうした商品化の流れに異をとらえてか、昔からの焼き物どころである読谷村喜名番所の復元整備（写真15：2005）では、赤瓦よりも前の時代の灰色瓦を再現して用いている<sup>24</sup>。実は赤瓦が一般に普及しはじめるのは大正時代に入ってからのもので、それまでは一部の特権階級を除き民家はすべて茅葺きだった<sup>25</sup>。それにもかかわらず、今では地元の人でさえ沖縄の古民家の特徴を聞かれば赤瓦屋根をまずあげるだろう。つまり、赤瓦に沖縄の古き良き風景を見ているつもりでも、誰かのディレクションで作らされた夢の景観を見ているに過ぎないのだ<sup>26</sup>。その誰かとは、“観光のまなざし”に他ならない。

観光による地域振興という観点から考えると、積極的に伝統的な景観を再現し、観光資源としていくことも考えられる。実際、竹富島では観光開発により過疎化に歯止めがかかり、人口が増加に転じている。数年前に台風で大きな被害を受けた渡名喜島<sup>27</sup>でも、観光による島おこしが模索されている<sup>28</sup>。しかし、古い建物に似せて新しく作られた建物は、あくまで作り物の舞台装置であることを忘れてはならない。コピーは時には、本物の持つ価値を落とすこともある。現に、御菓子御殿以降、赤瓦は使うのが少々ためらわれる素材となってしまった。赤瓦の文化的価値を高めるためには、量の確保よりも質の向上を目指すべきだろう。琉球王国時代の家屋制限令<sup>29</sup>の復活は無理かもしれないが、たとえば沖縄県公文書館（写真16：1995）のように、少なくともキッチン<sup>30</sup>に見えないような使い方の工夫が必要であろう。

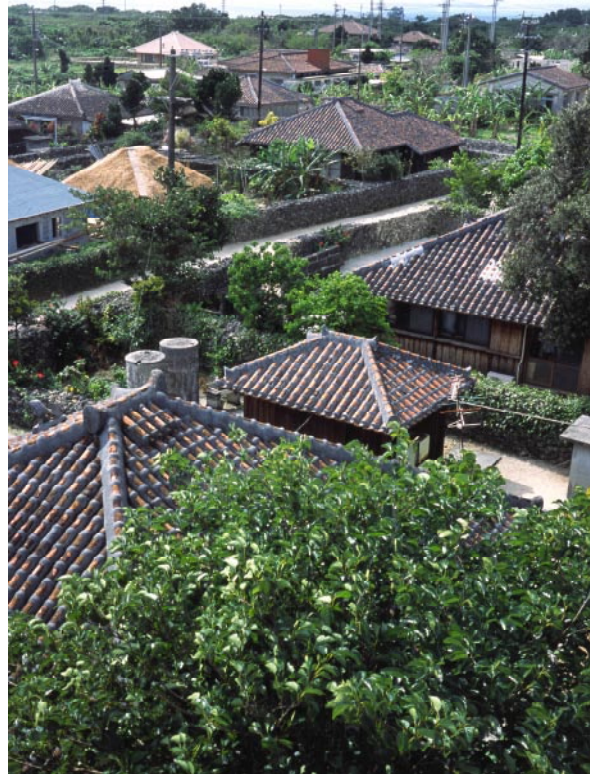


写真13 竹富島



写真14 御菓子御殿



写真15 喜名番所

もう一度、海洋博の時代に戻ろう。海洋博のための宿泊施設として国場幸房(1939-)率いる国建が恩納村に設計したのが、県内初の本格的リゾートホテルのムーンビーチ(写真17:1975)だった。ムーンビーチは、ハワイ島のマウナケア・ビーチホテルを参考にして計画され、全長400メートルにもおよぶ建物の足下をすべて吹きさらしのピロティとし、リゾートとしての開放的な雰囲気を作り出すことに成功している。ただし一般の観光客が沖縄のリゾートを目指すようになるのは、70年代末の航空会社の沖縄キャンペーン<sup>31</sup>が大ヒットした後のことである。その後、恩納村一帯は沖縄を代表するリゾートゾーンとして発展していく。しかしそれは同時に、海の商品化を招く結果ともなった。

そうした動きに真っ向から異を唱えたのが、復帰前後に沖縄入りしていた象設計集団とアトリエ・モバイルたちだった。彼らが沖縄の集落生活空間に関する膨大なフィールドサーベイに基づき設計したのが、今帰仁公民館(写真18:1975)である。鮮やかなショッキングピンクに塗られた200本余りの列柱が目を惹くが、実はその背後に工夫がある。大屋根の下に分散して配置した部屋と部屋の間を半戶外空間とし、建物内部と芝生の中庭を一体的に利用できるようにしている。こうした間取りは沖縄の古民家にも共通するもので、沖縄建築の特質を赤瓦屋根のような表面的な形態にではなく、風の吹き抜ける空間構成に求めた傑作といえよう<sup>32</sup>。

象とモバイルは、1981年に名護市庁舎を完成させる(写真19)<sup>33</sup>。市民に開かれた施設であることを計画の出発点とし(分舎式間取り、通り抜け通路、立体テラス)、気候への対応法を考え(風の道、壁面ルーバー)、それを地場の素材(型枠ブロック)と意匠(シーサー、赤瓦風屋根ルーバー)を用いてまとめ上げた力量は見事である。名護市庁舎は時と共に成熟していく数少ない近代建築の一つであり、今では風格さえ漂わしている。その空間に身を置くと、時の流れがゆったりと感じられる<sup>34</sup>。



写真16 沖縄県公文書館



写真17 ホテルムーンビーチ



写真18 今帰仁公民館



写真19 名護市庁舎

ここで思い起こされるのが、1980年に発表された喜納昌吉&チャンブルーズの名曲「花」である。どこか沖縄の空気を感じさせる心地よいメロディーは、アジア各国でも大ヒットした。同じく喜納たちが1977年に発表した「ハイサイおじさん」は、方言による歌詞と琉球音階でエキゾチックな沖縄らしさを前面に出していた。さしずめ、今帰仁公民館は「ハイサイおじさん」に、名護市庁舎は「花」に例えることができるだろう。この時期に沖縄は、文化的に一つのピークを迎えていたのである。

### 3. マスツーリズムの時代

1983年、恩納村に大型リゾートホテルの先駆けとなる万座ビーチホテル（写真20）が完成する。その白い外観は無国籍であるが、アプローチの熱帯花木や背景の青い海との取り合わせが抜群で、トロピカルリゾートとしての雰囲気作りに大きく貢献していた。その後、沖縄で白は積極的な意味合いを持つ色となっていく。1999年に開港した新那覇空港ターミナルビル（写真21）も建築的な見所は特にないが、その白い外観が周囲の熱帯花木を引き立たせ、南国ムードを盛り上げている。2003年には、那覇市がコーラルホワイトをタウンカラーとして選定した。

1984年には観光客が200万人を突破し、沖縄観光は航空会社と旅行代理店がリードするマスツーリズムの時代を迎える。

守礼の門のすぐ脇に位置する那覇市立城西小学校（写真22:1985）は、景観に配慮して集落風に分節した赤瓦屋根を用いている。その後、コンクリート打ち離しの躯体の上に赤瓦屋根をのせる住宅スタイルが県内各地で流行する。赤瓦は本来の防水のためではなく、断熱効果や景観上の配慮のために使われるようになっていく。原広司（1936-）とアトリエϕによる城西小の洗練された“沖縄らしさ”の表現は、時代はやや前後するがザ・ブームの大ヒット曲「島唄（1993）」を思い起こさせる。

1987年にリゾート法が制定され、沖縄にもバブルの波が押し寄せてくる。同年開か



写真20 万座ビーチホテル



写真21 新那覇空港ターミナルビル



写真22 城西小学校



写真23 沖縄市総合公園ゲート

れた海邦国体<sup>35</sup>では、守礼の門をコピーした会場ゲート（写真23）がお目見えする。海洋博に端を発する自然（ビーチ）と文化（赤瓦）の商品化の流れは、観光客の増加とともに県内全域へと広がっていく<sup>36</sup>。

観光化の影響は、80年代後半に人気を集めたりんけんバンド<sup>37</sup>やネーネーズ<sup>38</sup>などにも見て取れる。どちらのグループも本土からの見え方を初めから意識して、楽曲や衣装を工夫している。彼らが強調したのは、オリエンタルでエキゾチックな観光文化としての琉球イメージだった。

そうした大衆化の流れに最後の反撃を試みたのが、真喜志好一（1943-）たちが設計した沖縄キリスト教短期大学だった（写真24:1989）<sup>39</sup>。東シナ海を望む小高い丘の上に位置するキリ短は、琉球石灰岩の大地の上に築かれたグスク（城）のようなたたずまいを見せる。最初はそのコンクリートの量塊に圧倒されるが、親しみやすいスケールに分節された襷の多い空間は、次第に海の中の珊瑚礁のように感じられてくる。色とりどりの衣装に身を包んだ熱帯魚が行き来し、時にはタコやウツボも出没する（数年前、男女共学になった）。真喜志は、象らのように風土の表現を伝統集落には求めず、珊瑚礁に育まれた島の心象風景をここに再現しようとしたのではないだろうか<sup>40</sup>。

キリ短以降、沖縄に文化的に重要な建築はほとんど建っていない<sup>41</sup>。モノからコトへ。マスツーリズムの時代を迎え、沖縄は急速に情報の波に飲み込まれていく。

#### 4. 沖縄ブームの到来

1991年には、観光客が300万人を突破する。この年に湾岸戦争が勃発し、観光業界は苦戦を強いられる。

沖縄にとって幸運だったのは、当時、大人気だった漫画『美味しんぼ』がその第28巻「長寿料理対決!!」で世界一の長寿地域の秘訣として沖縄の食生活を7回にわたり取り上げたことだった。1993年からフジTV系「料理の鉄人」に出演していた料理評論家の岸朝子（両親が沖縄出身）が、ことあるごとに沖縄の郷土料理を紹介してくれたのも効果的だった。“健康・長寿の島”としての沖縄イメージが、茶の間に定着したのである。少し前の新聞記事によると、東京都内に沖縄料理の店が530軒以上もあったという<sup>42</sup>。

1992年には、復帰20周年事業による首里城復元工事が一部完成する（写真25）。翌93年にはNHK大河ドラマ『琉球の風』が放映され、県内でも琉球処分（1872）以前の大航海時代に学べ（帰れ）という“琉球ナショナリズム”が興隆した。その背景には、戦災で失われた過去に対する憧憬の念と、失業率の高さや進まない基地問題といった現状に対する不満が見え隠れする。

1994年には、沖縄県物産公社がマーケティング活動の拠点として「わしたショップ」を銀座にオープンさせる。おりしもの沖縄ブームにのり、数年後には類似施設でトップの売り上げを計上し黒字経営にのせる。今では、全国に20店舗を展開するまでになった。



写真24 沖縄キリスト教短期大学



写真25 首里城正殿



しかし現実の沖縄は、健康・長寿の島ではなくなりつつある。ほぼ完全な車社会で歩くことの少ない沖縄の肥満率は全国1位で、男性の平均寿命は1位から26位に転落した。女性もメタボリック・シンドロームの影響で平均寿命1位から陥落寸前となっている<sup>43</sup>。

この頃から、沖縄に対するイメージが現実を上回るイメージのバブル現象が顕著となりだす<sup>44</sup>。当時、テレビの歌番組を席卷していた沖縄アクターズスクール出身者たちも、厳しいレッスンの成果であるダンスを「沖縄は芸能の島だからみんなリズム感が抜群だね」と片付けられていた。

## 5. 楽園幻想の時代

1997年、名護市に九州・沖縄サミットのメイン会場ともなったザ・ブセナテラスホテル（写真26）が開業する。スペイン瓦葺きの屋根のスカイラインが印象的なブセナテラスは、沖縄のリゾートホテルがそれまでのハワイ型無国籍トロピカルリゾートから、バリ型楽園アジアリゾートへと指向を転換するきっかけとなった。

1998年には、観光客数が400万人を突破する。観光客の旅行形態もグループツアー（団体）が減少してレンタカー利用のフリープラン（個人）が主流となり、ホテル内でのエステ、スパ、リゾートウエディングなどが注目を集めるようになっていく。

2000年の九州・沖縄サミットの開催を期に、総務省はさらなる沖縄ブームの興隆を画策する<sup>45</sup>。城（グスク）群が世界遺産に登録され<sup>46</sup>、さまざまなメディアで“沖縄特集”が組まれる。さらに、世界最大級の水槽を誇る美ら海水族館（写真27:2002）やアウトレットモールあしびなー（写真28:2002）<sup>47</sup>、空港外免税店のギャラリー沖縄（写真29:2003）などの大型観光施設がオープンする。建築は文化的価値よりも、経済的効果を期待されるようになる。

意外なようだが、この頃までの沖縄は健康・長寿の島ではあっても癒しの島ではなかった。沖縄が“癒しの島”となるためには、人間関係が前面に出る必要があった。その



写真 26 ザ・ブセナテラスホテル



写真 27 美ら海水族館



写真 28 沖縄アウトレットモールあしびなー



写真 29 DFS ギャラリー沖縄

端緒を開いたのが、1998年にメジャーデビューを果たしたキロロだった（写真30）。読谷高校の同級生で、在学中に作った楽曲「長い間」が大ヒットした2人は、おおらかでのんびりとしたいわゆる“ゆるキャラ”の走りだった。

翌99年には、浦添高校の同級生3人で結成したモンゴル800がデビューする（写真31）。2ndアルバム『MESSAGE』はインディーズとしては前代未聞の260万枚を売り上げた。こうした同級生バンドの流れは、メンバー全員が東屋慶名（ひがしやけな）出身で2001年に沖縄デビューしたHY（エイチワイ）、2003年にメジャーデビューし、2ndアルバムの『musiQ』がやはり260万枚以上を売り上げたオレンジレンジ（北谷高校の同級生を中心に結成）へと引きつがれていく（写真32）。学級崩壊や凄惨な事件が相次ぎ、学校内の殺伐とした人間関係が問題視されている昨今<sup>48</sup>、部活の延長で音楽活動をして（いるように見える）、ビジネス的にも大成功をおさめた彼らの出身地である沖縄を、本土の若者が特別な場所（聖地）だと思い込むのも無理はない。

テレビ界も負けていない。2001年のNHK朝の連続テレビ小説『ちゅらさん』（写真33）のテーマは、“家族の絆”だった。『ちゅらさん』には、脚本家の岡田恵和（母親が沖縄出身）が理想とする故郷や家族の姿が描かれている<sup>49</sup>。先行き不透明な時代背景もあり<sup>50</sup>、『ちゅらさん』は大ブームを巻き起こし、シリーズ化が決定する。続くNTV系『瑠璃の島（2005）』では、沖縄はとうとう駆け込み寺となる。問題を抱えて島に流れ着いた人々は、島民との出会いを通じて癒され、それぞれの場所へと帰っていく。

同級生、家族、地域社会。癒しの楽園として描かれる沖縄のベースには、常に温かな人間関係がイメージされている。しかし統計データに示される沖縄社会の現実、メディアの伝える姿とはいささか異なる。所得が全国平均の約7割（全国最低）、出生率は全国最高。典型的な“貧乏人の子沢山”だが、ここまではまあよしとしよう。失業率が全国最悪、ここらあたりから雲行



写真30 Kiroro

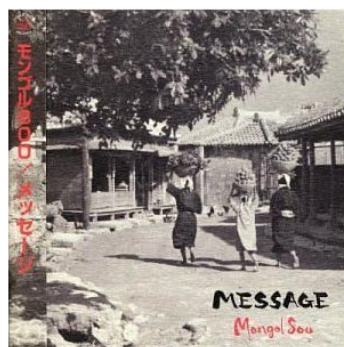


写真31 モンゴル800



写真32 Orange Range



写真33 ちゅらさん

きが怪しくなる。温厚な県民イメージとは裏腹に、男性優位社会の沖縄では家庭内暴力による保護命令件数が全国1位で、結果的に離婚率も全国最高となる<sup>51</sup>。そこからは、『ちゅらさん』に見られるような“貧しくとも明るくハッピーな”家族の姿は読み取れない<sup>52</sup>。

2003年末、沖縄県は犯罪を減らすために「ちゅらさん運動」を開始した。とうとう、現実をイメージに近づける努力を地元住民が始めたのである。

## 6. 夢見る頃を過ぎて

毎朝、子供を送った帰りに立ち寄る那覇新都心のスーパーのベンチに、しばらく前から若いカップルが寝ている姿を見かけるようになった。どうやら、素泊まり千円のゲストハウスに泊まるお金を惜しんだバックパッカーのようだ（楽園ホームレスと命名）。今では、沖縄で暮らすことがフリーターの若者たちの間で一種のステータスとさえなっているらしい<sup>53</sup>。

一方、彼らの周りにもものすごい勢いで建設されている高層マンション群（写真34）は、その大半が定年を迎えた県外の人達にセカンドハウスとして購入されている<sup>54</sup>。1987年に返還された米軍牧港住宅地区の跡地につくられたこのニュータウンでは、地区計画で傾斜屋根が義務付けられていることもあり、これまでの市街地よりも本土系大手ハウスメーカーのプレハブ住宅が多く見られる（写真35）。これまでの沖縄振興開発計画の目標（夢？）が常に“本土並み”であったことを考えると、購買力を付けた県民が全国ブランドに手が届くようになった状況を一概に否定することはできない。しかし沖縄の青い空に全くそぐわない全国均一の黒っぽいスレート屋根は、景観面での地域性の喪失を表している。一方、伝統的な赤瓦は、相変わらず商業施設で使われている例が多い（写真36）<sup>55</sup>。

憧れの外人住宅をわざわざ壊して作り上げたのが日本のどこにでもあるような地方都市の風景だったとは、いささか残念な結果だ。これなら昔ながらの市街地景観の方



写真 34 建設中の高層マンション（那覇新都心）



写真 35 ハウスメーカーのプレハブ住宅（那覇新都心）



写真 36 赤瓦屋根のコンビニ（那覇新都心）

がよほど個性的で、観光的な価値も高かったのではないだろうか。少なくともそこには、かつてみずから主体的に選択した夢が込められている。そもそも地区計画で傾斜屋根を義務付けたのも、本土の“先進事例”を参考にして決めたと聞いた。今だに沖縄の行政間に蔓延している本土並み症候群の弊害である。

アメリカ、琉球、トロピカルリゾート、癒しの楽園。これまでさまざまな夢が沖縄の上に刻み込まれてきた。東京の不動産ブームは沖縄にも押し寄せ、現在バブル期を上回る勢いでリゾート開発が進められている。恩納村では高級ブティックホテル<sup>56</sup>がオープンし、守衛のいる別荘地や大学院大学の建設計画も進められている。それが新たなあこがれの対象となるのだろうか？ 沖縄はまだ、21世紀にふさわしい夢を見つけていないように思う。

筆者は、これからの沖縄の夢は、失われつつある過去の記憶の中に探し当てることができると考えている。沖縄の海は「魚が湧く」と形容されるが、戦時中の飢えを満たしてくれたのは、婦女子でも簡単に拾い集められる貝類だった<sup>57</sup>。昨年、一夏かけて沖縄本島の海岸線を研究室で調査してみた<sup>58</sup>。その過程で298カ所の砂浜を確認したが、沖から陸まで護岸などの工作物が全くない天然の砂浜は四分の一にすぎなかった。あやしげな名称の公共事業（ふるさと海岸事業やエコ・コースト事業）で整備される見せかけだけの人工ビーチよりも、島蛸がとれる自然海岸（写真37）の方がいざという時に役に立つ。

あるいは、福木（ふくぎ）<sup>59</sup>の屋敷林（写真38）。赤瓦が普及する以前の簡素な茅葺き民家は、周囲を石垣や屋敷林などで固めなければ台風や冬の北風をしのぐことが難しかった。高温多湿な気候に適した開放的な民家の間取りにしても、屋敷林があっただけで成立するものだった。200年以上昔に植えられた福木の森に包まれた備瀬集落では、集落外で約34℃だった外気温が集落内では約31℃となり、舗装していない集落内の道の表面温度は25℃にまで下がっ



写真 37 自然海岸

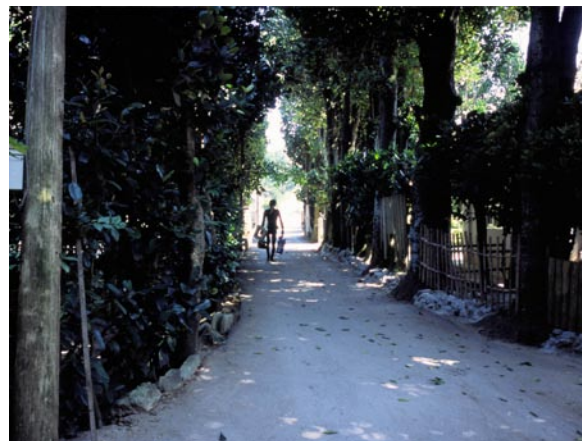


写真 38 備瀬の福木屋敷林



写真 39 那覇市内の並木道

た<sup>60</sup>。これだけ外気温が低ければ、開口部をあけるだけで室内を快適に保つことができる<sup>61</sup>。こうした屋敷林は、戦後の土地収用や生活の近代化にともない激減したが、現在でも南島型の生活空間のあり方を考える上できわめて示唆に富んでいる。

景観法の施行(2005)以降、沖縄でも市町村による景観条例の制定が相次いでいるが、残念ながらどれも場当たりの規制の域を出ていない。海洋博は確かに沖縄のイメージを飛躍的に高めてくれたが、沖縄観光はそろそろ量よりも質を重視するべき時期に差しかかっている<sup>62</sup>。赤瓦屋根よりも住まいの間取り、人工ビーチよりも水面下のサンゴ礁というように、トッピングに惑わされることなくベースに目を向けたい。きちんとしたベース(生活空間)があって初めてトッピング(観光地)も生きてくる<sup>63</sup>。表層的な観光地の景観と日常的な生活の場の風景はある程度、分けて考える必要があるだろう。

そろそろ他人の夢の後を追いかけるのはやめて、自分たちの足元を見つめ直したい。既成市街地でも、在来種系の木を植えれば20年で立派な並木となる(写真39)。蛸がとれる海浜を取り戻すためには、50年もあれば十分だ。福木の森の育成には、最低でも100年はかかる。人と自然が不可分だった頃の風景に、未来の沖縄の姿を夢見たいと思う。



写真 40 斎場御獄より久高島を望む

## コラム：沖縄にはイスラムがよく似合う？

かつて大正から昭和の初めにかけて、沖縄の伝統工芸品である壺屋焼きは瀬戸の量産磁器におされ困窮していました。それを救ったのが、琉球古典焼きと呼ばれるエキゾチックな意匠(エジプト模様やパイナップル&バナナ模様!)の土産物の生産でした。

沖縄にはそうしたDNAが今も引き継がれているのか、突然エキゾチックなデザインの建築が出現することがあります。その御三家が、沖縄コンベンションセンター(写真41:1987-2000)、国立劇場おきなわ(写真42:2004)、新県立博物館・美術館(写真43:2007)です。

国立劇場おきなわの外壁は網代状に竹を編み込んだ「チニブ」に由来し、新県立博物館・美術館の外観は「グスク」をイメージしていると設計者は説明していますが、やはりどこかイスラム風に見えませんか？



写真 41 沖縄コンベンションセンター



写真 42 国立劇場おきなわ



写真 43 新沖縄県立博物館・美術館

## 注

- 1 琉球政府統治下のコザ市（現在の沖縄市）で、米軍教務兵による交通事故を契機に発生した車両焼き討ち事件。米軍人や軍属などによる犯罪や事故に対する処罰が軽いとして、県民の間に不満があったことがその背景にあるとされる（参考資料：ウィキペディア）。
- 2 実際に、父親がフィリピン人だった。
- 3 戦後、沖縄の地酒である泡盛が広く一般に飲まれるようになるのは、1980年代以降のことだった。それ以前は、泡盛は労働者の酒で、スナックなどでは復帰特別措置法により本土よりも安かった舶来物のウイスキーが主に飲まれていた。
- 4 沖縄の新しい都市住宅のカタチ編集委員会（2000）、『沖縄の新しい都市住宅のカタチ』, p. 5, 沖縄教販
- 5 福島俊介（1999）, 「沖縄の石造と木造の住文化・沖縄の住まいの過去・現在・未来」, 『日本建築学会住宅の地方性小委員会沖縄研究会報告』
- 6 『住宅・土地統計調査（平成15年）』
- 7 将来の増築に備えて通り筋の柱を屋上まで角のように突き出しておくためこう呼ばれる。
- 8 『うるま（2007年3月号）』, 三浦クリエイティブ
- 9 サンディエゴ・シーポートビレッジを参照して埋め立て地に計画されたテーマタウン。
- 10 近くに米軍基地があるため、アメリカ人がアメリカンビレッジ内のスーパーなどを日常的に利用している。
- 11 嘉手納基地の門前町にあたるゲート通り沿いに立地しており、普段から米兵の姿が多い。
- 12 たとえば、沖縄から出稼ぎのため大阪に移住してきた県人たちは大正区の一画にバラック住宅を建て、“沖縄スラム”と呼ばれる居住地を築いた（沖縄タイムス2002年1月14日）。彼らは、「朝鮮人、琉球人お断り」の求人の貼り紙に示されるような厳しい差別にさらされた（沖縄県人会兵庫県本部35年史編集委員会編（1982）, pp. 38-39）。海洋博前年の1974年には、宮古島から大阪に出稼ぎに来ていた若者が被差別意識から勤務先社長の自宅に放火し、その後、自殺するという事件が起きた。少なくとも1970年代半ばまでの沖縄のイメージは、決して良いものではなかった。
- 13 後の作家・堺屋太一氏。
- 14 沖縄振興開発計画において、社会資本や収入のレベルを“本土並み”とすることが目標とされ、復帰後30年間に6兆円以上の事業費が投入された。しかし産業振興は軒並みうまく行かず、最終的になんとか残ったのが観光業だった。
- 15 多田治（2004）, 『沖縄イメージの誕生』, pp. 25-26, 東洋経済新聞社
- 16 会場設営費300億円に対して、国道58号線の整備には722億円がかけられた。
- 17 多田治（2004）, 『沖縄イメージの誕生』, pp. 50-54, 東洋経済新聞社
- 18 島嶼県で土地に余裕のない沖縄は実は“埋め立て王国”で、ここ15年間に東京ドーム183個分に当たる858ヘクタールの土地が新たに造成されている。『毎日新聞（2007年5月13日）』
- 19 後にテーマパークとなった。
- 20 多田治（2004）, 『沖縄イメージの誕生』, pp. 105-106, 東洋経済新聞社
- 21 当時、赤瓦屋根の新規工事はほとんどなく、瓦屋は修理で細々と生計を立てているような状態だった。沖縄館をきっかけに赤瓦（と魔よけ獅子のシーサー）の良さが見直され、公共施設や個人住宅に少しずつ使われるようになり、赤瓦業界は息を吹き返した。
- 22 1987年、重要伝統的建造物群保存地区に指定された。
- 23 国建の作風の変化（ムーンビーチ→県立公文書館→ブセナテラス→御菓子御殿）は、アトリエから組織事務所への組織の変化を示している。
- 24 歴史的景観としては正しいのだが、ビジュアル的には今一つ地味で、観光と景観のバランスの難しさを感じる。
- 25 1960年代の竹富島の写真を見ると、その当時でさえ多くの民家が茅葺きだったことがわかる。
- 26 1970年代の台風被害の後に茅葺き屋根は赤瓦葺きよりもむしろコンクリート造に建て替えられた件数の方が多かった。赤瓦葺きが増えたのは、伝統的景観の保存運動の隆盛（1980年代）と軌を一にしている。福田珠己（1996）, 「赤瓦は何を語るのか：沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動」, 『地理学評論』第69巻第9号, pp. 732-733
- 27 2000年に重要伝統的建造物群保存地区に指定された。
- 28 自主財源率1%未満の渡名喜島が財政破綻しないのは、『ちゅらさん』のオープニングにも使われた入砂島を米軍射爆場として提供しているからだ、それが観光のネックともなっている。同島では、米軍基地所在市町村活性化特別事業（島田懇談会事業）を活用し、2000年から使われていない古民家八戸を改装し、宿泊施設や食堂などを整備している。『沖縄タイムス2007年7月25日』
- 29 身分により、屋敷の敷地面積、家屋の床面積、赤瓦使用の可否などが決められていた。家屋制限令は、廃藩置県後の1889～1903年に廃止される。
- 30 俗悪で悪趣味な“まがいもの”のこと。

- 31 “日本のハワイ”を意識してか、初期にはビキニ着用のハーフのモデルが多用された（特に全日空）。
- 32 安藤徹哉（1996）、「現代沖縄建築史考」、『新建築住宅特集 118 号』, pp. 82, 新建築社
- 33 1981 年度日本建築学会賞受賞。
- 34 安藤徹哉（1996）、「現代沖縄建築史考」、『新建築住宅特集 118 号』, pp. 82-83, 新建築社
- 35 読谷村のスーパー経営者・知花昌一氏（1948-）は、海邦国体ソフトボール会場のスコアボード上の日の丸を引き下ろし、100 円ライターで火をつけた（参考資料：ウィキペディア）。器物破損の罪に問われた知花氏はその後、日の丸・君が代が法制化された 1999 年に読谷村議に当選した。
- 36 すなわち、沖縄全域のテーマパーク化の進行。
- 37 パフォーマンスにエイサーを取り入れた“うちなーポップス”バンド。
- 38 衣装に紅型のデザインを取り入れた“民謡コーラス”グループ。
- 39 1991 年度日本建築学会賞受賞。
- 40 安藤徹哉（1996）、「現代沖縄建築史考」、『新建築住宅特集 118 号』, pp. 85-86, 新建築社
- 41 数少ない例外として、末吉栄三（1945-）たちが設計した一連の学校建築をあげることができる。今年竣工した那覇市立城東小学校も秀作（写真 44）。
- 42 『沖縄タイムス（2005 年 7 月 1 日）』
- 43 『琉球新報（2006 年 1 月 25 日）』
- 44 善意と悪意というベクトルの方向が違うだけで、“沖縄びいき”も沖縄を特別視しているという点で“沖縄差別”と根は同じとの指摘もある。
- 45 『BRUTUS607 号』, p. 94, マガジンハウス（2006 年 12 月 15 日）
- 46 世界遺産に指定された後、沖縄随一の聖地である斎場御嶽周辺は駐車場や観光客相手のカフェなどが整備され、世俗化してしまった。
- 47 設計者のジョン・ロー氏は、「初めて訪れた沖縄の美し



写真 44 城東小学校

- さに感動し、ギリシャの風景がだぶって見えた」と語る。
- 48 実際には、沖縄でも本島南部を中心に子供のいじめ問題（お金と暴力がからむ）が深刻化している。
- 49 「沖縄のゆったりとしたリズムの中に、本土にはない新しい生き方が秘められている」、岡田恵和氏へのインタビュー記事より。『沖縄タイムス 2000 年 5 月 23 日』
- 50 同年、9.11 テロ勃発。
- 51 沖縄県企画開発部、『100 の指標からみた沖縄県のすがた（平成 16 年度版）』
- 52 さらに付け加えれば、中高年男性の自殺率も全国で 2 位〜3 位と高い（女性の自殺率は逆に全国で 1、2 を争う低さ）。
- 53 かつて“沖縄スラム”と呼ばれた一画も、1994 年には土地区画整理事業が完了し、今では“リトル沖縄”、“沖縄タウン”として雑誌やテレビ、新聞などで紹介されるようになった。「住んでいる人は変わらない。見る側の視線が勝手に変わっただけ」とは大阪人権博物館学芸員の仲間恵子さん談。『沖縄タイムス 2002 年 1 月 16 日朝刊』
- 54 近年、長期滞在しても住民票を移さない移住者が問題視されるようになってきている。
- 55 古民家を模した居酒屋や全国チェーンのコンビニにまで赤瓦が使われている。
- 56 全室プール付きスイートのオリエンタルヒルズでは、青色系の屋根瓦が使われている。
- 57 豊富な貝類のおかげで、沖縄では 10〜12 世紀頃まで貝塚時代が続いた。
- 58 米軍基地内や陸からアプローチできない箇所を除く。
- 59 福木はオトギリソウ科に属する雌雄異種の常緑高木で、樹高 20 メートル、樹径 80 センチに達する。直幹性が強く地際から頂部まで葉が密生し、防風、防潮、防砂、防火などに効果がある。
- 60 『Economix Design Magazine NO. 33』, 株式会社リブラン
- 61 沖縄でも都心では、クーラーの排熱やアスファルトからの輻射熱で夜間、窓もあけられないのが現状。
- 62 “コンビニ観光”と揶揄される沖縄観光の質を高めるためには、自然の再生とともに文化の再構築が必要となってくる（今年、新都心にオープンする新県立博物館・美術館などの“文化施設”とは別に）。今後、1970 年代半ばから 80 年代前半の沖縄で見られたようなマニアックな建築は、指名競争入札で設計者が決まる公共建築や資本の論理で作られる巨大リゾートよりも、小さな住まいの中に見いだせるのではないかと期待している）。
- 63 すでに成熟した観光客は、見せかけだけのトッピングなどに見向きもしない。